

# 特別寄稿

## 在宅看護学実習の取り組み

東京医療学院大学 保健医療学部看護学科  
柴田滋子

### はじめに

#### 1. 看護基礎教育における在宅看護論の位置づけ

看護基礎教育において「在宅看護論」は、1997年に新設科目として設置された。その後2009年には統合分野の1科目として位置づけられた。しかし、地域包括ケアシステムの構築が進む中、在宅療養者を対象とした「在宅看護論」では不十分であることが指摘され、2022年には地域で生活する人々を対象とする「地域・在宅看護論」に名称が変更され、また同時に統合分野から外され基礎看護科目に位置づけられた。

#### 2. 在宅看護学実習の概要

現大学における在宅看護学実習の履修時期は3年生の後期であり、2単位90時間となっている。また、履修の先修条件として、基礎看護学実習Ⅲ、在宅看護学概論、在宅看護学方法論の3科目を3年生前期までに履修する必要がある。

在宅看護学実習の学修目標は、以下5つを挙げている。

- 1) 地域で生活する対象者と家族の特徴を知り、支援方法を説明できる。
- 2) 対象者と家族の状況に合わせた看護技術の実施や具体的方法を説明できる。
- 3) 地域において対象者と家族をサポートするケアシステムの実際について説明できる。
- 4) 対象者と家族への援助の実際を通して在宅看護の役割を説明できる。
- 5) 専門職としての対応と責任ある行動・態度が実践できる。

2週間の中で、訪問看護ステーションに5日、地域包括支援センターに1日、病院の地域連携部

門に2日、学内2日とし、各施設2～4名の学生を配置している。教員は各施設に滞在することは難しいため、巡回時に、体調や実習目標、記録の確認や指導などを行っている。

#### 3. コロナ禍での実習状況

##### 1) 実習施設での臨地実習が全て中止となった時期

同行訪問が不可能となったため、脳梗塞後遺症でリハビリ中の方、在宅酸素療法を継続している方、精神疾患を持つ独居の方、小児等への訪問看護場面のDVDを視聴し、これを基に在宅療養における課題や看護の必要性、病院看護とのちがいについて、オンラインでグループワークやデモンストラーションを行った。また、臨地実習と同様に、各自1事例を選択して看護過程を展開してもらった。臨地実習中は、学生と会える時間が限られているため記録の指導はコメントの記載のみになってしまうこともある。しかし、学内実習では個々の考えを聞きながら記録内容の確認を行うことができ、学生の思考過程を把握しながら指導にあたることができた。一方で、複数名でのオンラインでのグループワークでは、1人1人が意見を述べて終了してしまうこともあり活性化することに難しさを感じた。

##### 2) 日数や時間を縮小して臨地実習が可能となった時期

在宅看護学実習で使用する施設は小規模であることが多く、感染症対策も様々であった。施設の意向で、早期に通常通りの臨地実習が可能となった施設、また、未だ時間短縮が条件となっている施設もある。このような状況の中で、学生には少

しでも臨地体験の機会をもってほしいと考え、1件でも同行訪問が可能な場合はお願いをした。また、公平性を保つために、同行訪問が可能な施設には、他の施設に実習中の学生についても同行訪問の可否について相談して多くの学生が体験できるように努めた。学生にとっては十分な情報収集が行えず、また、初対面の訪問看護師に同行する形になったが、学内に戻った際に、「こんな場面が見れた、こんなことをやらせてもらいました」と生き生きと話す様子から、学習効果はあったと考えている。そして、この貴重な体験をどのように活用していくかが重要と感じた。

また、同行訪問が難しい訪問看護ステーションには、可能な範囲で事例の提供をお願いした。学生は、看護展開を通してケアを考え、途中、指導者とWEB上で質問や意見交換する機会を設けながら進めた。実習指導者は、学生がイメージしやすいように短い動画を準備するなど工夫を凝らし、また、関わっている中での悩みや戸惑いなども話してもらうことで、紙面事例にはない現実感があり理解が深まったのではないかと考えている。コロナ禍の感染症対策に追われる中、実習指導者が学生の学びにどう貢献できると共に考えて協力していただけたことは非常に心強く有難く感じた。

#### 4. 在宅看護学実習で大切にしたいこと

##### 1) 学内実習では難しかったこと

通常、3年生での実習では、報告・連絡・相談ができる学生が多い。しかし、臨地実習の経験が少ない学生は、必要な報告が無く、指導者から聞いて知ったということもあった。また、「療養者や家族に質問したいがどのように聞けばいいですか？」という問いを受ける度に、近年指摘されているコミュニケーション能力の未熟さを感じた。オンライン上では一方向になりやすく、状況に応じたコミュニケーション能力や態度の育成の難しさと、また、学生と教員の関係性構築にも課題があるように感じた。

在宅看護学実習では、病院で治療中の患者ではなく地域・在宅で生活する療養者の理解が目標の

1つになっている。しかし、学生は紙面上での展開に慣れているためか、「疾患や障害」に着目した治療や指導を主とした看護計画を立案する者が多くみられた。実施ができないため、反応が得られずその方に合った方法であるのか評価ができない。このためPDCAサイクルの意義への理解を深めることにも難しさを感じた。

##### 2) 臨地実習で大切にしたいこと

臨地実習は、実際を見て、感じて、実施を通して振り返りができる場と考えている。臨地では緊張して血圧測定ができなかったなどの体験を通して、理解できていることが実施できることではないことを知る機会となる。また、これらの経験から実践力の大切さを感じるなど様々な気づきが得られる場であり、ここから成長に繋がることを期待している。とくに、在宅看護の対象者の生活は日々変化している。このため対象者にしっかりと向き合い、相手の反応や変化をキャッチし、状況に合った対応を自分なりに考えることで実践力に繋げてほしいと考えている。

実習では学生の主体性も重要といわれている。有意義な臨地実習を行うためには、学生が実習の意義を理解し、モチベーションを高めて実習に臨むことが大切であり、このための準備と支援に努めることが必要と考える。